

流星
星
物
質



短編集
流星物質

著

珠洲鈴涼理

神秋昌史

柊晴空

引導

ころみごや

絵

のの

『流星ハートビート』版

各作品の見所を紹介！

【Re:Dead／リ デッド 珠洲鈴涼理ナザリンスナリ】

手前味噌ですが作家志望な私の作品です。シリアスな命の遣り取りを探しているあなたにオススメ！

主人公、女子学生、軍人の行動や想いに注目ください。生きるとは何か、死ぬとは何か。彼らによる救いの物語をお楽しみください。

【カミサマキュー／かみさまキュー 神秋昌史カミキマサヒ】

スーパードラッシュ文庫で「オワ・ランデ！」シリーズを連載していた作家さんです。野球と笑いに飢えているあなたにオススメ！

カズシくとカガミさんの噛み合わない掛け合いに腹を抱えること間違い無し！ 野球好きもよく知らない人もレッツなっくるぼーる！

【bridal devil!／ブライダル デビル 柊 晴空ヒいらせいくう】

富士見ファンタジア文庫で「正しいアクのすくい方」シリーズを連載されている作家さんです。コミカルな萌えが足りないあなたにオススメ！

嫁にしたい悪魔ナンバーワン！ 清々しい溺愛を楽しめる一作です。きつと悪魔に恋することでしょう！
あなたも召喚して悪魔の旦那様！

【高熱姫／いんせう 引導いんどう】

独特な感性で女の子を描く作家志望さんです。レベルの高いエロ（!?）が欲しいあなたにオススメ！

高熱IIかわいの方程式にあなたもメロメロペロペロになること間違い無し！ 前半後半の対極的な味わいに心臓が高鳴ることでしょう！

【悪魔の色仕掛け／ころみごや】

シュールな持ち味で駆け進む作家志望さんです。押し掛けエロコメに期待しているあなたにオススメ！

かわい悪魔となら結婚できる？ テンションの高い悪魔の誘惑にきつと契約せざるを得ない！ あなたは悪魔の色仕掛けに耐えられるか!?

流星物質の構成物質一覧

Meteoroid's Contents

小説

1. Re:Dead	珠洲鈴涼理	4
2. カミサマキュー	神秋昌史	10
3. bridal devil!!	柊晴空	17
4. 高熱姫	引導	24
5. 悪魔の色仕掛け	ころみごや	30

リ デッド
Re:Dead

す ず りん す ず り
珠洲鈴涼理

空が遠ざかる。

* 2 *

発光する白が『彼』の視界を覆い尽くした。覚醒したばかりの視覚と意識を、鋭い白光が無理矢理に掻き回す。やがて眩い侵入者を優しい光と認識し、受け入れられるようになるまで数秒。『彼』が現状を理解し、現在を判別するのに十分な時間だった。

——そうか俺、死んだのかな。

『彼』は白一色の世界を目視するより早く、自らの死を自覚した。ついさっきの出来事に感じられる幕引きを明確に記憶しているのだから。青々とした天井が日常のよう『彼』から乖離していく様を、体感したのだから。

「はは、あの人たち助かったかな……」

死という非日常を理解して尚、三藩司みつまつかきは冷静であり、それでいて半ば自虐じみた達成感を獲得していた。

どうやら寝かされているらしい。光に満ち満ちた世界は白以外の何色もなく、何物も見えない。天井、もしくは空とも形容し難い空間が上方一面に広がっている。光が敷き詰められていて奥行きが掴めない。

命を引きずられた脱力感もなく、司は寝かされていた上体をゆっくりと起こした。視線と並行する地平線の向

こうまで淡い白色でぼやけている。足元は白光したそれではなく、床であるということが判るだけ救いだった。死んだのだから、死後の世界といったところか。司は特に自分の死を疑うこともなく直感的に結論づけた。

何か雑音や声が聞こえる。振り向いた先には人目では教えきれないほどの人が集まっていた。

彼らは各々に立つなり座るなり寝転ぶなりして謎の世界に佇んでいた。魂が抜けたような顔で宙を見つめる女、苦行から救われたような穏やかな顔つきでひたすらに折っている男、笑顔で泣き崩れている女、自らの境遇を受け入れられないのか落ち着かず歩き回る若者など様々だ。

『はい注目』

司の視界の端に、今までそこ居たかのように、忽如として忽然に女の子が現れた。空間内にいる誰もが女の子の声に意識と目を向けていた。

『参加者の皆さん、はじめまして。私の名前はイビル』
イビルと名乗った女の子は誰にともなく一礼。ぐるりと回り、スカート裾を摘んで参加者たちを一瞥した。

唯一この世界の事情を知っていきそうな女の子は、司よりと同年か年下かといった風貌だ。顔立ちは一四〇センチ程度の身長相応に幼く見える。だが司たちを見渡した双眸だけが異様に大人びていて、冷めていた。何かを達観視しているとさえ思える。

彼女は光にすらに溶け込めそうな白いドレスで全身を着飾っていた。お姫様めいたフリルやレースの装飾に加え、膝下まで覆うゆったりめのスカートは気品さえ感じさせる作りだ。死後の世界にいる天使だろうか。

腰まで広がるのは銀に近い輝きを放つどこか人間離れた美しく白い髪の毛だ。風もないのにふわりと揺れ、星のような粒子をばら撒いている。髪から振り落ちた星屑は流れ星のようにきらきらと光っては、消えていく。

額を覆う前髪は切り揃えられていて、左耳側のみあげをリボンで飾っている。

異質な世界の中で特異な姿の彼女は一際目立っていた。だから誰もが注目している。虚空を見つめていた女も彼女を見据え、祈る男は神にでも出会ったように見上げ、号泣していた女も涙を拭って見つめ、そわそわしていた若者も立ち止まって動向を見守っている。司も彼らに倣い、イビルに目を向けた。

『自殺し現世を捨てたはずの皆さん、自害し人生を終えたはずの皆さん。生と死の境界線——狭間はざまへようこそ』

司は目を見張って散在する人たちを見渡す。三〇人弱の集められた人々——イビル曰く全員が自ら命を絶ち、現実世界を捨てたのだというが……。

「境界？ 狭間？ 何を言っているんだ。私は死んだのだぞ。ここは死後の世界なんだろう？」

くたびれたスーツを羽織る中年男性が死んだ声を上げる。会社員らしいしき男に触発され数人が同意や疑問の声を投げかける。するとイビルは呆れた表情で、

『言ったでしよ、生と死の境界、狭間だつて。君たちは自殺した。だけど死んでいない、死にきっていない。まだ生きているんだよ』

あまりにも堂々とした言いっぷりに自殺者のざわめきが加速する。

「そ、そうか……。肉体がある、記憶がある、それに意識もある。確かに、死んでない……！」

学生風の少年の説明気味な呟きは納得するには容易く、受け入れることは至難であった。何故ならばなど言うまでもない、彼らは、自ら命を絶ったのだから。死ぬべくして人生を終幕させたのだから。

座っていた作業服姿の男が立ち上がり、イビルを睨みつける。

「お前は天国にいる天使みてーなもんじやないのかよ！ オレたちを痛みも苦しみもない死の世界に連れて行ってくれるんじゃないのか!？」

『天使？ ううん、私は死神かな。死を与える存在よ。でもね、現実から逃げるためにわざわざ命を落とした愚か者どもを……願い通りに死なせることなんかできない』
「オレたちに生き返れつて言うのか!」「あんな現実に戻

れって言うの!」「アイツのいる世界なんかもう嫌だ!!」
 激情に身を任せた愚か者どもは怒気を見に纏い立ち上がり、悠然と直立するイビルを取り囲む。一方で崩れ落ち、落涙し絶望に慟哭する愚か者もいた。両者とも勇気を賭した選択を侮蔑され、感情を露わにしているに過ぎない。そのベクトルが両反対なだけだ。

「フザケたことぬかしてんじやねえぞ、このツ!!」

第一声にイビルに食ってかかった作業服の男が岩石めいた拳を死神の顔面に振り上げる。死神は余裕の表情で、男の拳を眺めていた。そして遠慮のない一撃が彼女のいた宙を通過する。空振った男がたたらを踏んで転倒した。最初からそこに居なかつたかのように、突如として突然にイビルがいなくなつたのだ。

『毎回同じことを聞いて、毎度殴りかかってくる。だから自殺者なんて愚かなんだよ』

声が激怒する愚者から遠く離れた場所から響く。怒るでもなく、泣き落ちるでもなく事態を静観していた司の後方に出現していた。

『痛みから逃げた人間が苦痛なき終焉を迎えられると思つた? 世界はそんな上手に、優しくできていない。だけどそこまで酷でもないんだけどね』

ドレスの裾をお御足で振り上げ、屹然と、
 『あなたたちは愚者なの。痛みから逃げ、苦しみに立ち

向かわず、弱さを受け入れられず、現実に向けた。一瞬の痛みと苦しみを代償に、弱い自分を認めて現実を捨てる選択をした。ここには死による救いを求めた自殺者しかないの』

誰もが感情を発散することを止め、イビルの発言に取り込まれていた。あまりにも真実で、偽りなき事実を言い当てられ、沈黙する。

『あなたたちは死んでいない、生きている。死にかけなの。決死の行為全てが失敗に終わり、今も命が繋ぎ留められている』

「で、でも僕は絶対に死ねるように、会社に迷惑のかかるようにプレス機に飛び込んだはず! 挟まれて圧死する瞬間を覚えている!」

主張するのはツナギを着た若者だ。確かにプレス機で挟まれれば骨も肉も脳髄も等しく押し潰され、生き残る余地はない。だがイビルは頭かぶりを振って、

『何かが起こって機械が緊急停止したか、誰かが止めてくれたんじゃない? よかつたね』

奥の見えない笑顔で言い放つた。ツナギの男は目を見開いて崩れ落ちる。

『ここに来れたってことは少なからず致命傷を受けているんだけどね。どうしようもない理由で死のうとしたあなたたちを世界は見捨てなかつた。残酷にも、もう一度

やり直す機会を与えてくれたの』

たとえそれが本人の意志に反するとしても。

人生を犠牲にした言葉通り決死の行為は無駄に終わった。誰もが胸の内に言いようもない絶望を宿している。

『あーあ残念、死に切れなかった』

残酷すぎる、事実だった。

『自殺を図ったあなたは狭間の意志に選ばれ、この世界に喚ばれたの。でもここに在る肉体と現実世界にある肉体は全くの別物。今もあなたたちは現世側で生きながらえているの。』

ここにいる君たちは九死に一生を得てしまった。消費できなかった運を死に際に使ってしまったの。人生を劇的にしたがる若者に重体のところを発見され、自ら飛び込んだ危地を勇敢な勝ち組に救われてしまった。ここま
ま現世で治療を受けて生き返るかもしれない』

そんなのはイヤだ！ と誰かが反論する。すると死神はまたもやかと言う顔で嘆息し、

『そんなのはイヤだ、という愚か者どもに朗報です』

まるで説明口調なリズムで死神は続ける。

『いちいち命を落としてくれるあなたたちを全員収納できるほど死の世界は広くない。だが一人程度なら世界もみすみす死なせてくれるらしいよ』

愚者がとある可能性を信じ、顔を上げ始める。ここま

で言われれば、言わせれば誰だって理解に至れよう。

『この中でたった一人、一人にだけ本当に死ねる権利をあげます』

「オレに、オレにくれ！」「いや僕だ！ 僕が死ぬ！！」「お願い、お願いだから私に頂戴！」「テメェらどけよ！ 俺様がその権利を貰うんだよオ！！」「一番カワイソウなあなたにくれるよね!？」

希望を垣間見た途端、怒り狂っていた男も泣き叫んでいた女も怒声か叫声かもつかない大声を張り上げている！ 互いに互いを押し退け合い、突き飛ばし、弾き飛ばし、イビルに殺到する！ 彼らとイビルを結ぶ直線上にいた司は巻き込まれまいと転びかけながらも、何とか逃げる。愚か者どもは司に目もくれず死神に群がりだす。

『もう、幾回幾度もやめてよね』

群衆の最前列にいた女が勢い余ってイビルにぶつかろうとした瞬間、やはり立っていた場所に居なかったかのように、躍如として躍然に死神は消え去り、一番最初に登場した場所に降り立った。目指すべき対象を失った勢力の最前列が立ち止まり、突進を止められない後列がぶつかり、雪崩れる。集団に与していなかった司とその他三人だけが呆然と人の波の引いていく様を眺めていた。『そんなに今すぐ欲しいんならくじびきにしてみいんだよ？ 死に追い詰められるまでに天運のない全員で、

四つ折りのくじでもあみだくじでも、くじの運試しがイヤならじゃんけん大会でも開いて勝ち抜きバトルでもすればいいのかな』

そんなのはイヤでしょ、と問いかける。

『参加者にとつてもっと平等で、チャンスのあることをしましょう』

ばん、と一拍子、拍手。すると参加者の手元に向かい、どこからともなく光る球体が飛んできた。光球がそれぞれの手に当たると何かを残して散滅した。

それは一丁の拳銃だった。

『一人一丁拳銃をあげます。セーフティはないし、ハンマーを起こす必要もないよ。異常に軽い引き金を引くだけで邪魔者を撃てるようになってます』

司はL字型の拳銃をまざまざと持ち上げた。ずしりと重く、グリップを握ると銃の方から寄ってくるように、しつくりと手に馴染んだ。ちょうど人差し指の位置に備えられた引き金に指をかけようとして、思い留まる。

——これは軽々しく重い命を奪う道具。こんなもの、俺は使いたくない。

『マガジンには四発の銃弾が込められているの。全弾撃ち切ればどうなるか……わかるよね』

参加者がごくり、と唾を呑む。

『ルールは簡単で単純で容易。今から用意される舞台で、

自分以外の参加者をこの世界から退場させるだけ。現実世界で自分を殺したように殺せばいいだけだよ』

「まっ、待てよ！ 銃で殺したら死ぬってことだろ!?!
じゃあ——」

『この世界・狭間では【現実世界で言う死亡に至ると、現実世界に生還】するんだよ。つまり相手を撃てば生き返らせられる。そうするだけでたつた一つの死ぬ権利に一步近づくってわけ』

理解はできないが受け入れた、やや疑問を残したままの面持ちで男は首肯した。

（つまり現実で死ねば死の世界か、両方の境界である狭間に落とされ、この狭間で死ねば現実世界に落とされるってことか）

カミサマキュー

かみあきまさふみ
神秋昌史

「ちくしょーッ！」

思いっきり叫んで投げつけたボールは、ブロック塀に当たって跳ね返った。

てんでんと弾んで、ちゃんとオレのところまで戻ってきてくれる。利き手でそれを掴み取るなり、力いっぱい足下に叩きつけた——まっすぐに跳ね上がる白い影を追いかけて、青い青い空に向かってもう一度叫ぶ。

「ばっ……か、やろおー!!」

落ちてきたボールを、また塀に投げつけた。直球は勢いを失わないままどまんなか^{まんなか}に吸いこまれ、ビシッとカツコいい音を立てる。でも。

ストライクゾーン。ああ、ちくしょう。

打たれたのと、おんなじとこ投げちゃったよ。

「なんでだよ……オレが負けるなんて……!!」

奥歯を噛みしめて、視線を落とす。すりきれて泥だらけのスニーカーと、パンソーコーを貼った膝小僧。カーチャンには怒られてばっかだけど、オトコの勲章だと思つたのに。

ぜんぶがぜんぶ、ムダになっちゃった気分だ。

今日でオレは、すべてを失ってしまった。

「学校でいちばん、速いの……」

誰にもまともに打たれなかったのに。コントロールドってバツグンなのに。

あの塀に描かれたヘッタクソな、お皿だか太陽だかアりに包囲された豆大福だかわからない、でたらめな絵のまんなか^{まんなか}にだって——

「当てられるのにッ！」

がむしやらに力んで、ストレートを投げこむ。

コンディションは最悪、指の感覚もバラバラだ。落ちていてちゃんと投げたら絶対外さないけど、こんな状態じゃコントロールできやしない。

だから、その直球が狙い違わず、壁の絵にヒットしたのはたまたまの偶然で。けれどそれがなお、オノレのサイン^{たがわ}を信じる根拠となつてゆくのであつた。高川カズシ物語、第一部完。

わけわかんねー。

「あーあ……」

もう一度、一瞬だけ青空を見上げた。

十一年間——オレなりに熱く、太く短く生きてきたけど。こんなにくやしいのは初めてだ。なんだろうか、世界がくすんで見えるぜ。

ひよつとして、これが負け犬ってやつなのか？ よくトーチャンがカーチャンに言われているからナチュラルに聞き飽きてただけで、トーチャンってずっとこんな状態なの？ スゲェ。ハンパねえ。オレまだ負け犬人生二時間くらいだけど、すでにくじけそうだよ。こんなのト

「チャンの子として恥ずかしいよな。」

でも、だって、くやしい。くやしいんだ。

「くやしすぎて、思わずこんな山奥まで走ってきちゃったけど……何やってんだかなー」

いつもより大きく弾んでいるボールを、両手で取ろうと待ち構える。

少なくとも、ここへ来たことに意味はなさそうだ。走りながら『修行』とか口走ってた気がするけど、そのときのオレを今はぶん殴りたい。

「とつとと帰って練習したほうが、まだ……つと？」

あれっ、と一歩二歩、前へつんのめった。

ボールがなかなか、手元まで戻ってこない。あちらこちらに雑草の目立つ土の境内で、ぼーんぼーんと真上に跳ね続けている。ずつと、オレの顔の高さぐらいまで、一定のリズムで往復してるんだ。

あそこの地面、バネでも仕込んであるのか？　なんて首を傾げるオレの横手から、

「こりゃっ！」

と甲高い声があった。

驚いて見やると、女の子が一人、怒り顔でこっちを見ている——腰の近くまである、長いきれいな黒髪。白一色の、見慣れない形をした服。オンナの年なんてよくわからないけど、背格好はクラスメートの女子たちとだ

たい同じくらいだ。

小さな神社の、屋根のあるほうへ続く石段に立っている彼女は、呆気にとられて立ち尽くすオレをキンキン声で怒鳴りつけた。

「なにをしておるか、この無礼者めが!?　久方ぶりに人の子じゃと思うたら、見たこともない悪さをしよる！」

「……え……えっ？　なに、え……どっから……？」

たった今まで、確かに誰も、この境内にはいなかった。人の気配がまるでなかったからこそ、大声で叫んだりわめいたり、恥ずかしい台詞をぶちまけていたんだ。

なのに、この子は……？　てゆうか、

「誰……？　なにしてんの？」

「まこと、こちらの台詞というものじゃ、小童こわっはが！　いきなりやってきて五月蠅うるさうしたかと思えば、マコちゃんマコちゃんの絵を傷めつけおつて。元服しておれば神罰を喰らわせておつたところぞ！」

「ハア？　し、神罰？　てかだから誰だよ、あんたもマコちゃんマコちゃんつてのも——つと、とッ!？」

自分からボールに近づいて、両手を伸ばしたオレだけど。まさか空振りするとは思ってなくて、危うく転んじやうとこだった。

ギョツとして見ると、ボールがでんと——いや、そこら中をびよんぴよんと、生き物のように跳ね回って

いる。わけがわからない。そうだ、ここまで長く弾んでるってだけでも、十分おかしいんじゃないか。どうなってるんだ。何が起きてるんだよ。

混乱のままに女の子に目を向け、オレは気づいた。

彼女が右手をボールに向け、その動きに合わせて指先をびこびこ動かしていることに。……いや。違うのかもしれない。

ボールのほう指先に従って、動き回ってるのかも。

「ひ……!？」

ゾツとして、辺りを見回した。人気がない境内。取り囲む緑濃い木々。よく晴れた真っ昼間とはいえ、虫の声すらどこか遠く感じる。本当に、なんだってこんな、山奥にまで走ってきちゃったんだ。

なによりここは神社であって、そしてすぐそばには真っ白い——まさしく服を着て、どこからともなく現れた女の子が、こつちをにらんでいる！

「ば、バケモノっ……!？」

こわすぎ——

「無礼者ッ!」

る、と思った瞬間、ボールが強く跳ねてオレの顔を直撃した。

どてつとその場に尻もちをついてしまう。予想外の痛みに二重奏で襲われ、たちまち視界が涙でにじんだ。

「う、うつ、うぎゃあああ!?! た、たすけて——! ごめんなさいいごめんない、たつ、食べないでえ——!」

「誰が食べるか!?! まこと礼儀知らずな小僧よ、ワシを魑魅魍魎か何かと勘違いしとるな!?!」

「ち、ちみ……!?! わ、わかんねーけど、えーとすいませんもう悪さはしません! オレなんか食べてもおいしくないです! ジュツチューーハックです!」

自分の何が悪かったのかもわかってないけど、とりあえず謝るところ。だって怖すぎる。オバケとかそういうの、ほんとダメなんだってばよ。

ははあー、と地面にすりつけたオレの頭から、きつと一歩も二歩も離れていない場所で。じやりつと土を踏む音が聞こえ、オレはそのままの姿勢で体を震わせた。

「……ふん。ふふ、わっはっはっはっはっはっ!」

降ってきた盛大な笑い声に、怖さよりも一瞬の好奇心が勝る。

おそるおそる視線を上げると、女の子がにやにやとオレを見下ろしていた。

「なんとまあ、情けないやんちゃ坊主だことよ! そう怯えずともよい。少うし懲らしめてやるべしと思うただけじゃ——」

「ひ、は、そ、そうですかっ……!! こ、こらしみしました、十分こらしまりました。ですからどうか成仏してく

ださい！」

「まだ勘違いしとるな……。ワシは幽霊や、オバケではない。ここの社の神体じゃ」

「しんたい……？ あ、ご神体？ なんか聞いたことある。神社は神様のテリトリーみたいところで、いつも神様が居る場所にご神体があるって。この境内がグラウンドで、ご神体はマウンドみたいなもんなか。

てことはオレ、今、マウンドに怒られてんの？

「やっぱバケモノじゃん。せめてピッチャーが怒れよ。」

「じ、じゃあ、かつ、帰ります……！」

「まあ待て待て。こら、ど、土下座したまま後ずさるでない！ 小器用な小僧じゃのう」

きゅつと襟首を捕まえられる。

きゅつと悲鳴を上げてしまった。

もう一度顔を上げると、女の子が目の前にしゃがみこんでいる。死んだ人がお葬式のとときに着る服を、ひらひらにしてミニスカにして上着をつけて帯を締めたみたいなの……って、ほとんど別物だけど。そんな感じの、マジメなようなそうでもないような、よくわからない格好。

今までそっちに目がいつて、なんとなく怖く感じてたけど。大きな目や、ふくふくしたほっぺや、つんと尖った唇や……けっこ、かわいいかも。こんなオバケもいるんだな。

でも帰りたい。すぐ帰りたいです。

「いやオレ、その、えっと時間が……！ い、家のトイレの壁に浮き出た顔に見えるシミに向かって、今日一日のできごとを報告しないといけない時間だから！」

「怖いわ。ワシよりはるかに怖いわそのシミ」

「え、でも、じつと見ると笑いかけてくれて……」

「怖いと言うとるうが!? 絶対ただのシミではなかる!? な、なにやらその話も捨ておけんが……ともかくじゃ、小僧。あの絵に物をぶつけてはいかんぞ」

女の子は、さっきまでオレが壁当てをしてた、落書きだらけのブロック塀を指さす。

「特にあのまんなかの、鏡の絵にはな。ヌシはさつき、力いっぱい狙って当てよつたが……ワシへの無礼にあたるでの」

「カガミ、の、絵……？ どれが……？」

「あの丸いやつじゃ！ ここの管理をしとる家の孫娘、マコちゃんが一所懸命に描いてくれた！」

ああ。あの太陽だか大福だかのやつ、カガミだったのか。ムリだよそうは見えないよ。

「マコちゃんはとっても良い子なのじゃ。ちゃんとお詣りしてくれる上、我が本体である鏡の絵を描いてくれた。ワシは大好きじゃ。よって絵を傷めてはいかん」

「はあ……」

「まあ、神主のじーさんには、落書きしたことをしこたま怒られとったが……。しかし小僧。今さらにすぎることじゃが、ワシがちゃんと見えとるようじゃな？」

あ、やっぱり普通は見えないんだ。見えちやいけないモノなんだ。オレは今、物理法則を超越した存在、超常生命体と会話しているんだ。

……ひいひいひいひいひいひい。

「すいません見えててすいません！ 食べないでー！」
 「しつこいのう……もう置ききは終わりじゃ。さて小僧、名はなんという？」

「え……？ カ、カズシだけど。あつ、うわ、しまった！ 名前を知られると取り殺される的なアレが、アレが！

ひいひい！」

「もうよいというに。ヌシさえそうと願うなら、ワシがその壁のシミとやらを取り去ってやるぞ。どうじゃ？」
 「へ？」

きよんとするオレの頭に、女の子の手が触れる。

ひやつとしたが、なぜか不思議な温もりを感じるそれになでられて、胸の内側に抱えていた不安が薄れていくのを感じた。女の子が、にこりと笑う。

「ワシはこの神体。祀られておる神の力を宿した、古い鏡の化身じゃ。我が主でもある神に名はないが、心の清い幼子の味方を信条としておる……ヌシはイタズラが

すぎたものの、ワシの姿をちゃんと見れておることから考えて、性根はよいようじゃ」

「ど……どういう……？」

「もしも正道から外れてしまった子供や、元服後の大人が怒ったワシを目にすれば、それこそ恐ろしいバケモノの姿に見えたことだろうよ」

なんだそれ怖すぎる。オレいい子！ オレ超いい子！
 「ヌシも何事か負うものがあつて、こんなところまで来たのじゃろ？ ひとつだけ、なんでも力になってやるから、まかせておくがよい」

「そ、それ……願いが叶う、つてこと？」

「ま、おおむねそういうことじゃな。そのシミの正体がなんであれ、なに、ワシにかかれば——」

「だったら！」

オレは土下座状態から、跳ねるように身を起こした。

驚いたように目を見張る女の子のきやしやな手を、両手でガシツと握る。

「だったら、別の願いがあるんだ！ オレがここまで修行にきた理由！」

「ほ、ほう……？ え、修行？」

「あ。いや今のは言葉のなんか、アヤつてやつで。忘れて……と、とにかく！ 壁のシミなんてどうだっていいから、えつと、カガミさん！ オレを勝たせてくれ！」

「カガミさん……。まあよいわ。なに、勝たせろとな？
一体どんなシミに？」

「シミじゃない！ 伊藤いとうに！」

誰じゃい、とばかりにきよとんとされる。さっきのオレと真逆の立場だ。

ギリ、と奥歯を噛みしめて、胸の底で煮えたぎる思いを吐きだす。

「ついさっき、オレのボールを……。力いっぱい投げたストレートをホームランしやがった、リトルチームの伊藤！ あいつともう一回勝負して、勝ちたいんだ！」

そう。オレは負けた。ほんの二時間ほど前に。

あの野郎の一振りで、負け犬の烙印を押されちゃったんだ——

ブライダル デビル
bridal devil!!

ひいらぎせいくう
柊 晴空

プロローグ

「なーんでこんなことやっつてんのかなあ、俺」

休日、夜。薄暗い部屋の中でため息混じりにつぶやく。

床には赤いマジックが描かれた魔法陣。その真ん中に鏡面を黒く塗りつぶされた丸い手鏡。

幼馴染の姉ちゃんである雪ねえ曰く、これらで悪魔が呼べるらしい。そんなまさか。

そんなまさかと言いつつ、これらを用意しているのは当然悪魔を呼ぶためだ。雪ねえの命令でな。

彼女には逆らえないんだ。逆らったらどんな目にあわされることか。

とはいえ、生真面目に実行せずテキトーに報告してもいいんだが、それでも俺はこうやって準備をしている。

もしかしたら心のどっかで本当に現れるかもしれない。なーんで信じてるのかもな。

「はあ……ま、さっさと終わらせて雪ねえにいつも通り『何も無かった』と報告しよう」

なんだかんだ準備は整えた。

電気を消すと真っ暗な部屋、頼りは携帯の明かりだけ。

えーっと？ たしか呪文は雪ねえからの指令メールに書いてたよな。

「契約 我が望みを叶えるため この場に姿を？ 短
つ！ つていうか、普通だな、おい」

一人むなしくツツコミつつ、マッチに火を点け鏡面に落とす。

雪ねえからのメールには『これで悪魔が現れる』と書かれていたわけだが……

特に変化なし。

「ですよ。悪魔なんて現れたりするわけないよな。実験終わり、さっさと火を消……」

手を伸ばしたマッチの炎が激しく光を放ち目をくらます。

「ぬあっ！」

こうして俺は悪魔を喚んだ。

VS
雪ねえ

翌日、夕方のこと。

「……これが悪魔なの？」

「……らしい」

「悪魔だよーっだ」

オレの部屋に、悪魔召喚をやらせた張本人、幼馴染の雪乃こと雪ねえがやってきた。

腰に手をあて威風堂々と立つ姿はいつも通りだ。もつとこう雰囲気とかを改善してくれたら、黒髪長髪の綺麗なお姉さんなだけ……

実態を知っている俺には小さい頃から恐怖の対象ではありませぬ。

本当はこの悪魔『三里』が出てきていざこざを終わらせたあとすぐに電話したんだが、『眠い、明日行く』と電話を切られ今に至る。

「悪魔って本当にいたのねえ」

まじまじと三里を見つめる雪ねえ。

当の三里はどこか迷惑そうな顔をしている。
「ああ、オレもびっくりしたんだよ」

「それにしても可愛い悪魔ね。ナギがコスプレさせただけなんじゃないの？」

「この尻尾も羽も自前だよーっだ」

なにやら悪魔がご機嫌ナナメなご様子。

「っていうか！ ナギミ様！ この方は誰なの！ ナギミ様の彼女とかならサクつと殺つちゃうよ！」

「殺るな!! この人はオレの幼馴染で小さい頃からよく遊んでた佐々礼雪乃さんだよ」

「ふーん、ナギミ様の幼馴染さん……なら、妻であるミサも挨拶すべきだよね！」

あ、雪ねえの表情が少し引きつった。ヤバイ、俺ものすごくここから立ち去りたい。

「お初にお目にかかります。ナギミ様の願いを叶えるべく現れた超絶美少女悪魔、兼！ 良妻賢母を目指す花嫁の桜三里でっす！」

雪ねえの表情がさらにひきつる。

笑ってるけど、あれ絶対心の中じゃ笑ってない。

「あーらー？ お姉さんの聞き間違いかもしれないけど、今花嫁って言ったかしら？」

「聞き間違いじゃないよ？ ナギミ様の花嫁、言い換えれば妻。ちよつと古臭く言うなら奥方、英語で言えばワイフなのだよ！」

「悪魔が花嫁？ 何馬鹿なこと言ってるのよ。寝言は寝

ていいなさいな、小悪魔さん？」

引きつった笑顔の雪ねえが三里に詰め寄る。

なんだろう、火花が見える。二人の視線のあいだに。

っていうか、なんでこんなことに？」

「だいたい百歩、いや一万歩譲ってあなたが嫁だとして、私を通さずにそんなこと許されると思って？」

「へー、アナタの許可がいるんだ。それは知らなかったよ」

僕も知りませんでした。

「それじゃアナギミ様は頂いていきますねっ」

「そんなもらっていきますね♪ で、渡すわけじゃないじゃない！ っていうか、何言われたって渡さないわよ！

小悪魔風情に小さいころから私好みに育て上げたナギを取られてたまるもんですか!!」

衝撃の事実。

なに？ オレ雪ねえ好みに育てられたの？

イジメてたの間違いじゃなくて？

「奇遇だねー。アナタ好みはミサのタイプど真ん中どストライクだったみたいですよ。長い間、私好みのご主人様を育ててくれてありがとうございます」

「ちよっとナギ！ この子ムカつく！ この態度はいいとしてナギのお嫁さんになるだなんて認めないわよ！

どういふことなの！」

「いやそもそも俺も別に認めてないし……だいたいそうだったのは昨日……」

「………嘘だろ、おい」

薄暗い部屋の中、思わずそう呟く。

今まで雪ねえがオレにやらせてきた怪しい儀式は一度も成功しなかったってのに。

今回は違った。

現にこうやって目の前に謎の少女が現れた。

とはいえ、この悪魔。悪魔に全く見えない。

オレが想像していた悪魔はもっとう半人半獣とか、もっとおぞましい姿をしたものなんだが……

「初、現、界!!」

変なポーズをとる悪魔。

ふわっとした亜麻色の髪、丸みを帯びた頬に幼さの残る顔つき。

穏やかな気配すら漂わせるこの少女に思わず見惚れる。これが悪魔？

「やったよ！ とうとうミサを呼んでくれる方発見！ このご時世に悪魔なんて用済みだと思ってた！ きやつ

ほう！」

「……マジで？」

「マジだよ、大マジ。もうリアリスト多すぎ！ おかげでほとんどお役御免。あっちの世界で腐って死ぬとこだつたよお」

「いや違う違う違う、そういうことじゃなくて……」
 どうにも勘違いしているっぽい俺が疑問に思っているのはそこじゃなく。

「お前本当に……悪魔なの？」

見た目や雰囲気が悪魔というより天使だ。

「じゃなかったら私は何なんなのさー。ただの美少女じゃないよ。ちっちゃいけど羽だつてあるし、ほら、この愛らしい尻尾！」

そう言つて目の前の悪魔がオレの方にお尻を向けてくる。

確かに尾てい骨のあたりから黒い尻尾が伸びていた。

「そんなまさか……」

あり得るか？ こんなこと。

けど、目の前には羽も尻尾もついた女の子が突然現れた。

落ち着け、オレ。

これは夢だ。ありきたりな考えだけど、夢だ。フラグ

っぽいけど夢のはずだ！！

ほら、この尻尾だつてよおく見たら偽物っぽいじゃないか。

だから、こうやって引つ張つてみれば簡単に取れ……

「ひゃんっ！ いきなり引つ張らないでよ！ エッチ！」

「え！ あ、すまん！」

取れない！！

なんかもうわけがわからなくなってきた！

「コホン、なんだかまだ呆けてるみたいだけど、早々にお仕事モードでいっちゃうよ。ビジネスのお話しなのさー」

「ビジネス？」

「イエス！ ビジネス！ 疑いつつとはいえ、何か願いがあつて私を呼んだんでしよう？ さあさあ、なんでも叶えて差し上げましょー！」

そう言つて悪魔が満面の笑みを浮かべる。

『あ、可愛い』なんて思ったのは内緒。

「さあさあ！ 初現界だから、ちよつとテンション高いし、どんなことでも応じちゃうよ？ エッチなもの……まあ……オッケーです！」

いやいやいや、悪魔相手にそんなこと頼めるか。

とはいえ……

ヤバイ。

なんにも願いが無い。

「そうか、そうだよな、呼び出す文句にも『我が望みを』
つてあったもんな。」

だからって遊び半分で呼び出したんだ。

当然願事も考えていない。

「あのおー、聞こえてますかー？ 無視されると私の乙
女心が傷ついちゃうよー？」

「あ、ああ、聞いている。願心事、だよな」

「そう、願心事！ どーんな願心事も叶えちゃうよー、
いいい！」

なんかもっと悪魔って怖いイメージがあったんだけど、
コイツは無邪気だ。悪魔なのに。

正直、けっこうタイプかもしれない……

いやいや相手は悪魔だ。それよりも願心事、願心事……

「お金持ちにしてくれ！ でもいい気はするけど、なん
だかなあ。」

悪魔に叶えてもらおう願いがそれか？ って気もする。

じゃあ、えーつと……

「まーだでーすかー？ まさか願心事もないのに呼んじ
やったの？ 泣くよ？ 泣きながら代償だけ貰っていく
よ？」

「いや泣かれても困る……って、代償？ なんだ代償っ

て」

「代償は代償だよ。タダで願い叶えたりするわけないじ
ゃん。悪魔なんでもん」

それもそうだ。悪魔だもんな。

「待ってくれ、その代償ってのはなんなんだ？」

「んー、アナタの何かを貰うことになるかなあ。まあも
うだいたい決めてるんだけど……お願い聞いてから教え
たげる！」

嘘だろ、おいおい……

「じゃあもしお前が俺の命って言ったら……」

「ありがたくいただきます！」

いい笑顔だな、こんちくしよー。

待って待って、こんなことで死ぬるか？ 死ねないっ
て。

「いっそ、何もせず帰ってくださいとかお願いしてみる
か？ どうなるんだろう？」

「まあでも？ 別にアナタの命を頂こうなんて思っ
てないからご安心を」

「っ！ ホントか!？」

「私嘘つきません。あ、いや嘘ついちゃうけど、嘘じゃ
ないよ！ 命なんて私にはなあーんにもいいことないも
ん」

「だけど死ぬような代償を……とか」

「ないない。そんな身構えられるような代償もらわない
って」

「ホントに本当？」

「うん、ホントに本当」

「……………よかつ、たあああああああああ。」

雪ねえの実験のせいで死ぬなんてごめんだ！

「これで不安はなくなりました？」

「あ、ああ。なくなった」

「ではでは、願い事を言っちゃいましょう！ SAYー」

SAYー！ と言われても困る。考えろ考えろ。

いや、ほんと彼女になつてくれ！ とかでいい気もするんだが……………

悪魔が彼女ってのはさすがに……………なんで悪魔なんだろうな？ こんな可愛いのに。なんて悩んでも仕方ないか。

もうこうなつたらなんかテキトーに……………

「モテモテ……………」

「……………はい？」

「オレを、モテモテにしてくれ！」

高熱姫

いんどう
引導

ぼくが裂瀨さくらいキセキの病室を訪ねたのは、学校帰りの夕方五時すぎくらいだった。

ぼくは逸る気持ちを抑え、控えめに病室の扉をノックした。

「どうぞお」

という返事が扉の向こうから返ってくる。

「失礼します」

裂瀨の病室は清潔感のある白を基調とした部屋だった。

壁紙の色は白で、床はクリーム色、カーテンの色は薄いピンクだ。部屋のなかは、消毒用アルコールの匂いと、

裂瀨の匂いで満ちていた。裂瀨の汗の匂いだ。彼女が、一日の全てを過ごすこの部屋には、彼女の匂いが染みついていていた。

裂瀨が発する吐息や鼻息が蒸気となって、空気と入り混じっている。空気にとけこんだ裂瀨の匂いをぼくは全体で感じていた。

部屋の奥にあるベッドに目を向ける。ベッドには一人の少女が横たわっていた。

「リョーゴくん、こんにちはあ」

裂瀨がベッドから上半身だけを起こして、言った。

「こんにちは、裂瀨。今日は身体の具合はどう？」

「今日はとーってもラクなんだあ。朝からずっと起きてても平気なくらい」

そう言って裂瀨は、にへーっと笑った。

裂瀨の笑顔を見ると、自然とぼくの表情もほころぶ。

——裂瀨は生まれつき体が弱いのだそうだ。

頻繁に熱をだし、意識を失うことも多々あるという。

普段から体温が高く、平熱でも三十八℃近くあるのだった。そういう体質らしい。そのため、裂瀨はいつも熱で頭がぼおーっとしているらしい。彼女の喋り方が、語尾を伸ばすような甘えた調子になっているのも、熱で気分がハイになっているせいなのだ。決してカワイ子ぶつてゐるわけではない。これが裂瀨の素なのだ。

ぼくは裂瀨のベッドの側の椅子に腰かけた。

裂瀨のベッドからはしめつたような甘い匂いがした。

裂瀨は寝てばかりの生活だから、その寝汗をたっぷり吸っているのだろう。

「お笑いグループの『らっきいず』って知ってる？」

ぼくは裂瀨に聞く。

「うん。知ってるよおー！ この前、お笑いグランプリで準優勝してた人だよねえ。惜しかったなあおー」

「そうそう。よく知ってるね。ぼくさ、彼らのモノマネ練習してきたんだ。観てくれる？」

「ホントおー？ 見せて見せてえ」

裂瀨が無邪気にはしゃいだ。期待の眼差しがぼくに向けられた。

「……それじゃいくよ？」

ぼくは照れ隠しに、オホンと咳払いをすると、その芸人の持ちネタを披露してみせた。ぼくの喉から芸人そっくりの声が出るりとでた。

お笑いグループは三人グループだったが、ぼくは一人で三役を難なくこなした。

「わあー。そっくりい！上手だねえー」

裂瀬が、小さな手をパチパチと叩いて喜んだ。

なんとも言えない達成感が、胸の奥からジンワリと湧き上がってくる。

裂瀬は、病院で一人過ごすとき、よくテレビのお笑いのコントの番組を観ていることをぼくは知っていた。

だから、ぼくは裂瀬とその話をするため、その番組を録画し、何週も観るようにしているのだった。特に裂瀬がお気に入りのお笑いグループの漫才は、暗唱できるほど繰り返し観ている。いまモノマネをした『らっきいず』というグループも裂瀬のお気に入りのお笑いグループの一つである。

「そうだあ。わたしもお礼にモノマネするねえ」

ぼくは意識を集中。今まで培ってきた記憶をフル動員する。間違いは許されない。

裂瀬は、有体に言って、下手くそなモノマネをした。

「あはは。全然似てねえ」

「……『ハニーライス』のモノマネかー。裂瀬は上手だなあ」

「えっ？ そうかなあー。うれしいなあ」

「うんとつても上手だった。ぼくも負けてられないなあ」
口にしたグループ名が正解だったようなのでホッとする。裂瀬を悲しませることがなくてよかった。

——裂瀬キセキは、十三歳だ。本来なら、中学二年生になっている年齢である。しかし、裂瀬が学校の制服に袖を通したことは、たぶん、ない。裂瀬の病気は、学校に通うことは困難をきわめるそうで、今後もその見通しもないようだった。

それほどまでに裂瀬の小さな肉体を蝕む病気は、悪質なものだった。

「そういえば、今日の体温はどう？」

ぼくは思いだしたように聞く。

「えへへえ。あててみてえ」

裂瀬は鼻をつきだして、おでこをさしだした——その姿はまるでキスをせがんでいるようにも見えた。

ぼくは顔の高さを、裂瀬に合わせると、軽く前髪をかき分けて。自分のおでこをくつつけた。

べたり。

裂瀬のしっとりとした髪の毛から汗の匂いがする。すんすん、と嗅ぐと匂いからも裂瀬の体温が感じられた。

「——三十七℃四分くらい？」

裂瀬は脇に挟んでいた体温計をとりだして、ぼくに渡してやる。体温計の表示は『三七・六℃』だった。ハズレだ。

ぼくはひどくガツカリしたが、裂瀬は笑っていた。

「リョーゴくんがお見舞いにくれてくれたから嬉しくて上がっちゃったんだあ」

「……そうか、じゃあぼくは、裂瀬の体温がこれ以上上がってしまわないうちに帰らないとな」

「ええーっ。ひどいよお」

ぼくは自然に笑みがこぼれた。

もちろん帰るなんて冗談だ。一秒でも長い時間、ぼくは裂瀬と過ごしたい。

それにぼくが帰ったら、裂瀬は一人ぼっちになっちゃまう……。

裂瀬の家族は、母子家庭らしいのだが、母親は仕事で忙しいらしく、病室に足を運ぶことはほとんどなかった。

そのうえ裂瀬には、同年代の友達はいないらしい。小さい頃からずっと入院しっぱなしではそれも仕方ないことだ。

そんな裂瀬をぼくたちが放っておけるはずもなく、だからこうして毎日のように、裂瀬の病室に通っているのだ。少しでも彼女の退屈をまぎらわせてやるために。

ぼくたちは、現在高校二年生。一六歳。裂瀬とは三歳離れている。

裂瀬は学校に通っていないせいか、実年齢よりさらに子供っぽいところがあり、ぼくたちにとっては妹みたいな存在だった。

病弱で儂げで、可愛らしく、守ってあげたいと心の底から思えるような女の子、それが裂瀬だった。

ぼくが裂瀬とお笑いの話に花を咲かせていると、不意にノックの音が聞こえた。誰か来たようだ。

「どうぞお」

来訪者がだれかは分かっていた。

裂瀬の病室を訪ねてくる人物は、ぼく以外に一人しかいない。

「よおーっす！ 二人とも」

白のスポーツを提げたいかにも部活帰りの野球少年が病室に入ってきた。

練習帰りらしく、汗くさく泥で汚れている。

その人物は裂瀬のもとに一直線。裂瀬の肩にふれて、その頭を撫でてやった。

「……おい、瑞島みずしま。入口でちゃんと消毒しただろうな？」

「細かいことは気にすんなよ。なっ？」

その男は、ぼくに向けてニッと笑う。

——こいつはぼくの友人、瑞島孝たかゆき之だ。

「瑞島くうん、こんにちはあー」

「おう、裂瀬。元気してたか？」

「うん。今日はとっても元気だよお」

「そりゃよかった」

瑞島の手が、ぼん、ぼんと裂瀬の頭の上へのせられる。

「えへへえ」

裂瀬が嬉しそうにハニかんだ。

——裂瀬に対してあんなに気安く……！

胸の奥で炎がチリツとうずいたが、表情にはださない。

「いきなりで悪いが、今日はあんま長居できねーんだ」

「ええ〜」

裂瀬が不満に唇を尖らせた。

「なにか用事でもあるのか？」

——裂瀬に会うことより大事な用事が、という語意に

含めて言う。

瑞島がいなくなったら裂瀬は悲しむだろう。

「仕方ねーだろ？ 今月末に、夏祭りがあるのは知って

るだろ？ あれでさ、子供会の小学生連中が和太鼓を叩

いてるんだが、その教育担当がおれでな、その稽古が

夕方にあるのよ。だから部活も早くあがらせてもらった」

「そういえば、そんなものもあったな」

「夏、祭り……」

裂瀬が瑞島の言葉を反芻する。

その表情はどこかうつとりしていて遠いところを見つめていた。

——イヤな予感がする。

「夏祭り、行きたいなあっ」

やはりそうきたか……。

裂瀬の身体のことを考えるなら、その意見には賛成で

きなかった。夏祭りの会場は病院からも遠い。何かあつ

たときのことを考えると危険すぎる。

「ダメだ」

とぼくは言った。

「ええ〜」

「そもそも外出の許可がでるわけないだろ」

ぼくはバツサリと意見を斬り捨てたが、裂瀬は耳を貸

さない。

「打ち上げ花火、見に行きたいなあ」

裂瀬は夢でみた内容を語るように、恍惚の表情でつぶ

やく。

「………っ！ 大体なあ、花火を見るなんてそんなこ

とできるはずないだろ。今度、ぼくが何でも買ってきて

やるから、諦めてくれないか？」

ぼくはなんとか裂瀬を諫めようとする。

「そうかそうかあー！ それじゃ今年は三人で行くか！」

瑞島が裂瀬の側についた。

「お、おい！ 瑞島！」

「まあまあ、いいじゃねーか。細かいことは気にすんなよ。ちよつと抜け出すくらい何も問題ねーつて、な？ 裂瀨」

「うんうん！」

裂瀨は完全に乗り気だ。

「でも、おまえ……裂瀨の身体になにかあったら……！」

「大丈夫だって。もし裂瀨の体調がわるくなったら、病院にすぐ引き返せばいいだけだろ？」

「そうだよお。行きたいなあ行きたいなあ」

裂瀨は甘えるような目で、ぼくを見つめてくる。

「……………」

瑞島が裂瀨の側についたせいで、ぼくの旗色はすこぶる悪い。

このまま反対で押し切っても、ぼくが悪役扱いされてしまうことは間違いない。

瑞島のやつ、余計なこと言いやがって……！

こいつはいつもそうだ。

すぐに裂瀨を悪の道に引き込もうとする。

過去に隠れて病室にお菓子をもちこんだ前例があるし、今だって勝手に病院を抜け出す算段をしている。そりゃ裂瀨本人は喜ぶだろうが、彼女の身体のことを考えたら、そんな悪事に賛同したくない。

「おねがぁい」

「……」

「リョーゴくうん……」

甘えるような声で裂瀨が鳴いた。背中がぞくりとする。こんな可愛い生物、地球上を見渡しても裂瀨以外には存在しないだろう。

今の声を録音して、寝る前に何度も聞きたいと思った。どうしてぼくはボイスレコーダーを常備していないのだろう……。

キュツとぼくの手があなたかいかいものに包まれた。

それは裂瀨の手だった。

小さくてあなたたくて、汗で少ししめっていた。弱い力がにぎにぎしてくる。

「わたし、リョーゴくうんと夏祭りどうしても行きたいなあっ」

「……。……。分かったよ。ただし、当日に熱があったらそのときは中止だ。こればかりは譲れない」

「ありがとおー！」

本当にうれしそうな顔で裂瀨は笑った。

——裂瀨は最近体調がいい日が続いてるみたいだし、まあ、大丈夫かな？

悪魔の色仕掛け

ころみごや

トントン——。

窓を叩く音が聞こえた。

「……ん」

ぼくは布団から起き上がり、窓の方を確認してみる。

カーテンが閉まっているので外の様子は分からないが、何だか気味が悪い。もし仮に、窓の外にいるのが泥棒だとしても、窓を叩く必要はないはずだ。

だとすれば、今の音は空耳か幻聴に違いない。そう思い込むことにしようじゃないか。

トン、トトトントン、トントン——。

——と、たわ言を呟いている場合ではなさそうだ。

窓を叩く音が大きくなってきた。どうやら空耳ではなかったらしい。その音が何気に軽快なテンポを刻んでいるのが気になるが、ぼくは不安を抱きつつもカーテンに手を掛けてみる。

「……誰も、いないのか？」

窓の外には、誰もいなかった。

だがしかし、窓を叩く音は確かに聞こえた。

ぼくは首を傾げると、窓の鍵を開ける。そして——、

「——イェスツ、ウイー、キャンツ！　がめつく潜入、しぶとく占拠ッ!!」

強烈な衝撃が、ぼくの顔面を出迎えてくれた。

「あがつ、な、なんだつ、なんで急に真っ暗に——ッ!?!」
女の子の音が聞こえると同時に、ぼくの視界は真っ暗になってしまった。

光を奪われてしまったぼくは、一種のパニック状態に陥ってしまい、一心不乱になって暗闇の出口を探し出す。
「あれっ？　ちょ、ちょっとキミい！　いきなりそんなところを触られてしまったら少年誌的に困るではありませんか——っつて、……あつ、ああつ、んあつ」

同時に、女の子の艶っぽい声が耳元へと届けられる。

残念ながら今のぼくは現状を把握することができない状態にあるので、奪われた視界の外で何が起こっているかを理解することはできない。

すぐそばで、思考回路が狂ってしまったようになるほどの声が聞こえてくるというのに、それを視界に映し出せないもどかしさが辛すぎる。

「んああつ！　そんな積極的に動かないで下さい、じゃないと——んっ!!」

ふいに、視界に光が飛び込んできた。

もがくののを止めて目を細めてみると、目の前——否、ぼくの顔面には、真っ白で柔らかなものが乗っかってい

るではないか。

ほんの少し視線をずらしてみると、ぼくの顔を覗き込む可愛らしい女の子を発見した。頬は赤に染まり、恍惚とした表情を浮かべている。先ほどの艶かしい声と何か関係があるのだろうか。

「もがもが……」

キミは誰だ、と言ったつもりだが、口が塞がれているので上手く話すことができない。しかもぼくが口を動かそうとする度に、女の子が『んあ、ああ……っ』と十八歳未満にはお聞かせできないような声を上げていく。

何がどうなっているのか分からずに、ぼくは自分の口元を押さえつける真っ白なものをよく確認してみる。そして、ようやく理解した。

「——ッ」

ぼくの顔面に乗っかっている真っ白なものは、女の子のショーツだ。

自分が置かれている状況を理解したぼくは、気づいた時には鼻血を垂れ流していた。

「およっ？ ……ねえ、キミ？ 大丈夫ですか？ 鼻血出てますけど」

心配をする前に、先ずは顔の上から退いてもらえないだろうか。顔面を押し潰したまま動かないんだからな。

「もがもがっ」

「んう、だから喋らないで下さいってば。ボクは敏感なんですからね？」

さすがにこのままでは窒息死するかもしれないので、ぼくはショーツ越しに女の子のお尻を掴んで、そのまま押し上げた。

「くっ」

顔面だけでなく、どうやら後頭部も強打してしまったらしい。これはたんこぶができそうだな。オマケに鼻血が止まらない。というか、この女の子はいったい誰だ。

「ふふふ、心優しいボクめがキミのお鼻を拭いて差し上げましょう！ さあさあ不埒な妄想によって緩みつぱなしの穴を塞がせて下さいっ」

「ちよ、お前……ッ」

単語の一つ一つとしては問題ないかもしれないが、それを繋げて言葉にしないでもらいたい。

そしてそんな台詞を女の子が堂々と云ってのけるのは勘弁してほしい。

女の子は、ニヤニヤと笑いながらぼくの肩に手を置いて、もう一方の手に持った紙切れのようなものをぼくの鼻の穴に容赦なく突っ込んだ。

「ぐがっ……、これ、何だよ!？」

鼻の穴から中途半端に飛び出る紙切れに見覚えがあるような気がしてならない。

「それですか？ ふっふっふ、そこに落ちていたゴミの中から割かしリサイクルできそうなものを選びすぐって突っ込んでみました。キリッ」

そう言つて、女の子はぼくの財布を指差した。何だか嫌な予感がある。

「ま、まさか……ッ」

慌てて、財布の中を確認してみた。

確か財布の中には、高校の入学祝いとして隣の家の爺さんから貰つた一万円札が入っていたはずだが——案の定、それはなくなっていた。

そりやそうだよな、だつてぼくの鼻に突っ込まれている紙切れがそれなんだから。

「んっ、何を鼻血止めに使つて——ふがっ!!」

「あー、ダメですよ。キミは重病なんですから、捨てられた子犬のようにジツとしていてくれないと困るじゃないですか——」

鼻の穴につめられた一万円札を取ろうとするが、女の子はそれを許さない。

それだけに止まらず、あろうことか布団の上にぼくを押し倒した。

「いやはやボクとしてはこのまま一気に契約を交わしておきたいところなんですけども、さすがにそればっかしは説明ナシでは許可できないらしいんですよー。だから

ら一応、今から自己紹介をさせていただきますよ」

ぼくを押し倒したまま、その女の子は言った。

「ではでは初めまして、ボクはイヴリースと申します。以後、お見知りおきを！」

「……イ、イヴリース？」

「はいです。最近流行の除菌スプレーのフアブリー何とか言うのと混同しないように注意していただければ至極光栄なんですよね」

オウムのように名前を繰り返すと、イヴリースと名乗る女の子は満面に笑みを浮かべながら手を差し出してきた。握手を求めているんだろう。しかしながらぼくは彼女に笑いかけられた瞬間、思わず顔を逸らしてしまった。

それは何故か。正直恥ずかしくて言いたくないんだが、実は彼女の笑顔のせいで心臓が飛び跳ねそうになったのが原因だ。

「おや、握手拒否ですか!? ここここいつは初っ端から手厳しい仕打ちですね！」

「あ、すまん……」

よよよ、と泣き崩れそうなポーズを取る彼女を見て、ぼくは慌てて握手を交わす。

「そうです、それでいいんですよ！ やつとキミの手をがっしりと握ることができました。うむうむ、これでボクもようやく夢に向かって一歩前進ってわけですね！」

今夜のビールはきつと格別な味がしますよ!!」

「一人で勝手に盛り上がりとうするな。それと未成年がビールを飲むんじゃない!」

彼女のテンションが高すぎるせいか、ついついツッコミを入れたくなってしまった。

だがそれも、無理もない話だ。

容姿然り、体型然り、ぼくと同じ年ぐらいの女の子がビールの味を語るのには、はっきり言って似合わなすぎるからな。

イヴリースという名の女の子は、群青色に染まる長い髪を白色のゴムで二つに別け、ツイントールを作っている。後ろ髪の長さとは対照的に、前髪は眉に掛からない程度の長さで横一線に切り揃えられていた。

ぱつちりとした両の瞳は、エメラルドのように光り輝いていて、その瞳が彼女の存在を印象付けていることは間違いないだろう。

白磁のように繊細な肌は、触れることすら躊躇わせるほどの美しさだ。

全てにおいて完璧と言わんばかりの彼女だが、一つだけ残念な部分を見つけた。言わずもがな、無い胸だ。

少し古い表現で言えば洗濯板——否、まな板と言った方が合っているかもしれない。

因みに言うと、背の高さも百四十センチあるかないか

だが、それはむしろ彼女の可愛らしさを強調する結果となっているので何ら問題ない。

「ぬふふつ、安心してもいいですよ。キミの前で実年齢を明かすのはえつちいことをするよりも恥ずかしいですけど、キミに疑われるのはボクとしても御免被りたいのです。というわけでして、渋々ながらもお教え致しますよ! ええ、実はですね、ボクは今年で百四十歳になるんですつ! キミは知ってまし——」

「知らねえよつ」

「ですよねー? キミが知らないことぐらいボクは知ってますとも!」

「殴りたくなってきた。……なあ、殴ってもいいかな?」
「か弱い女の子を殴るような男の子に育てた覚えはありませんか?」

「お前に育てられた覚えもないけどな!!」

ツッコミを入れるのを待っていたのか、彼女は口角を上げて意地悪そうに笑った。

「そもそもお前は誰なんだよ? どうしてぼくの部屋に入ってきたんだ? これは明らかに不法侵入だろ」

怒の感情を、ほんの少しばかり表に出す。

入ってきたと言うよりは、這入ってきたと表現した方がしっくりくるかもしれない。

「ふう、やれやれ、不法侵入とは心外ですね。キミはお

忘れですか？ あの時のボクは、キミに会いたい一心で閉ざされていたはずの未来——もとい、窓を軽快なテンポを刻むようにノックしたではありませんかっ」

やはりあれは彼女の仕業だったらしい。しかしテンポを刻む必要はない。

「先ほども言いましたが、ボクはキミと契約を交わすために夜這いしにきたのですよ」

各作品の続きは会場でお確かめください！！